

おじいちゃんとイルカショー

「すごかったなあ。さっきのイルカ。あんな高いところまでジャンプしたり。」

夏休みも終わりに近づいたある日、私はおじいちゃんに水族館のイルカショーに連れて行ってもらいました。ショーも終わりに近づいた頃、おじいちゃんが私に言いました。

「もうすぐ2学期が始まるなあ。」

「でも、2学期になったら、いややなあ。」

「どうしてなんや？」

「だって、運動会あるやろ。わたし走るの遅いし、全員リレーのとき、みんなに迷惑かけてるんやろなって、すごく気になるねん。」

おじいちゃんは少し間をおいてから、話し始めました。

「この水族館とは違うんやけど、とても人気のあったイルカがいたんや。そのイルカが死んでしまったとき、新聞にも載ったぐらいや。どんなイルカやったと思う？」

「新聞に載るくらいやから。きっとすごい演技をするイルカなんやろな。」

私がそう答えると、おじいちゃんは次のように話しました。

「そのイルカはな、全くその逆なんや。今見たショーでも、イルカがハイジャンプとか、水面を立ち泳ぎとかしてたやろ。新聞に載ったイルカも、他のイルカと一緒に演技するんやけど、ハイジャンプはみんなの半分も飛べへん。立ち泳ぎは溺れてるようにしか見えへん。そんなイルカやったんや。」

「そなんあかんやん。何でそのイルカがそんなに人気あったん？」

「飼育員さんは、他のイルカと同じ演技ができるよう厳しく練習させていたんや。でも、だんだん元気がなくなってエサも食べなくなったんや。そこで、うまくできてなくても、がんばってる時にはほめるようにしたんやて。」

「そしたらどうなったん？」

「また元気になったんや。でも、相変わらずジャンプは他のイルカの半分も跳べへん。けどなあ、ジャンプの助走は他のイルカの何倍も泳いでたんやて。」

「そのイルカ、すごしがんばってるんやね。」

「そうや。」

おじいちゃんは続けました。

「高くはジャンプできないけど、懸命に演技する姿を見ると、お客さんも不思議と心を打たれて幸せな気持ちになったそうや。毎日一緒に練習してる飼育員さんや水族館の人は、そのイルカが、一番お客さんを幸せにする力をもってることにちゃんと気づいてたんや。大事なことは演技の上手い下手やないってことや。その証拠に、一緒に演技する他のイルカたちも、そのイルカを仲間はずれにすることは決してなかったんや。」

おじいちゃんはそこまで話すと、優しくそうな目で私を見て言いました。

「おじいちゃんも、あんたがいつもがんばってるの知ってるで。クラスにもあんたががんばっていることを知っている人がきつというと思うな。おじいちゃんは、あんたのがんばっている姿で元気もらってるんやで。」

「うん、そうか。おじいちゃん運動会見にきてや。」

おじいちゃんと見たイルカのショーは、この夏一番の思い出となりました。